

投球感覚「見える化」

野球 データ革命

④

回転方向や変化量計測

プロ野球界でデータ活用による強化が進んでいる。チーム編成や戦術立案の裏付けとなるデータが、選手の特徵や癖をあぶり出し、パフォーマンス向上に役立てる動きが加速している。米大リーグを追いかけるように広がるデータ革命。野球の「見える化」は現場にどんな変革をもたらしているのか。

山口ら投法修正

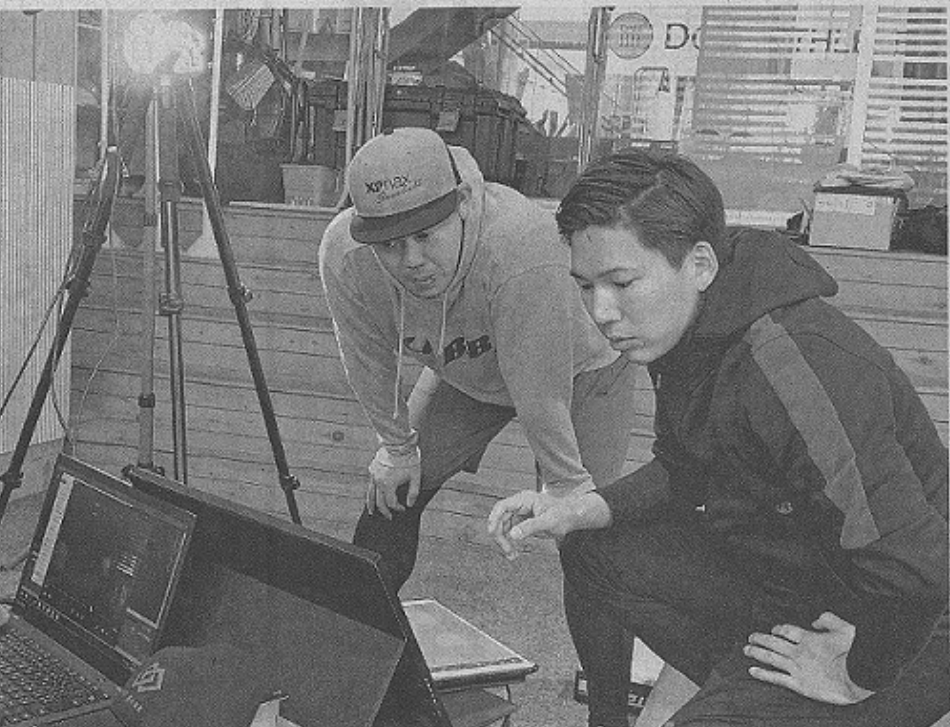
2月上旬、東京都内のトレーニング施設に、米キャンプを直前に控えた山口俊(ブルージェイズ)の姿があった。マウンド脇にハイスピードカメラ、捕手との間には回転数や回転軸の方向など球質をリアルタイムで計測できる機器が配置されている。様々な球種を投げ込みながら、ボールの変化量や腕の軌道をパソコンで確認した。

巨人時代も投球の修正にデータを利用してきたという。「自分では高めの直球で空振りを取るスタイルだと思っていたら、実際は(伸びるように見える)ホップ成分がなく、垂れる真つすぐでゴロを打たせる投手というデータだった」。この発見が昨季のリーグ最多勝にも生かされている。

今季から挑むメジャーではパワーヒッターが多く、空振りを奪える球質にしたい。縦回転のきれいなスピンの効いた球筋を生かすには、リリースポイントを一定させることが大事。改めてデータの力を借りるべく、この日も超スロー再生映像や数値で確認した。

テクノロジーの進歩によって膨大なデータ取得が可能になり、それを読み解く力も必要になってきた。今回計測を行ったのはネクストベース(東京・品川)。球団へのデータ解析の支援や選手のパフォーマンスの改善を手助けしている。

現状の球質を踏まえて理想の投球をコンサルティンクする同社は、2年前から菊池雄星(マリナーズ)をサポート。毎回登板後にフィードバックを行い、データに基づいてフォーム修正



メジャー先鞭 日本も追う

まで踏み込む。このオフは空振りを増やす狙いで課題を「球速アップ」「ホップ成分の向上」「高めに投げる」に因数分解してフォーム改造に着手した。

同社のエグゼクティブフェロで野球選手の動作解析を研究している神事努・国学院大准教授は「菊池投手は言語化する能力が高く、トレーニングや栄養まで話が及ぶ。どれくらいの変化量のある球をどこに投げればどういう結果になるか、最適解に合わせてアドバイスできるのが我々の強み」と語る。

球場に測定機器

米国では2000年代に入って統計学に基づく分析手法「セイバーメトリクス」が広がった。15年には動作解析システム「スタットキャスト」が全球場で導入され、あらゆるプレーの数値化に先鞭(へん)をつけてきた。

日本球界でも弾道測定器「トラックマン」など先端技術の普及が契機となって「球が伸びる」など感覚的だったものを数字で語れるようになり、選手の技能向上や育成まで活用が進む。

現場の関心も高い。このオフには西武やロッテなどが、新たなトレンドになっている米シアトルのトレーニング施設「ドレイブライン・ベースボール」に選手を派遣。ソフトバンクもスタッフを日本に招いた。

沖縄の合同自主トレで阪神の藤浪晋太郎とともに講習を受けた中日の藤嶋健人は「何か得るものがあればと思っ参加した」。重さの異なるボールを使ったトレーニングによる球速アップ、メーカーをつけた動作解析など最新のプログラムに触れた。

米大リーグでは今季、テニスのボール判定に採用されている映像解析システム「ホークアイ」が導入される見通し。今後も技術革新が、打球に角度を付けて長打を狙う「フライボール革命」のような新たな理論を生んでいくだろう。データがプレーや選手の新たな価値を引き出す時代が来ている。

アナリストとともに球質データやフォーム画像を確認する山口④

AR
NIKKEI